2024.9.01.
T. Kobayashi

乗り物で行く「おくのほそ道」その2
仙台から象潟・鼠ヶ関まで

●仙台・塩釜・松島

松尾芭蕉は、仙台に着くと国分町の知人宅に宿泊。亀ケ岡八幡宮・榴ヶ岡天神・末の松山などを見た後で塩釜へ向かい、さらに船で松島に入った。

仙台駅から仙石線に乗って本塩釜迄行き、海の香りを感じながら塩釜神社あたりまで散策してみる。本塩釜駅に戻り、松島海岸まで行き、時間があるなら瑞巌寺を見た後島巡りの船にでも乗って、松尾芭蕉の境地に浸るのも良い。

芭蕉一行はこのあと石巻まで行くのだが、途中の矢本で喉が渇いてたまらず、付近の家を訪ねては湯を求め続けたがどの家も応じてくれない。途方に暮れていると刀を差した 57.8 才の通行人が不憫に思い、知人宅まで案内してくれて、振る舞いを受けた。そればかりか、今宵の宿をと言って、石巻の新田町のさる人の家を紹介してくれた。

松島海岸駅から仙石線に乗り、七つ目の駅が矢本。それからさらに六つ目の駅が石巻。

海に向かって南へ歩くと日和山公園がある。海辺の海抜 54mなので、海岸の様々な景観が楽しめる。

「曽良随行日記」では景観の素晴らしさをたっぷり語っている。

「おくのほそ道」では松島の記述の次は平泉になっているが、「曽良随行日記」を見るともう少し細かな動きがわかる。柳津（やないづ）というところで北上川を渡船して登米に入って北上して、山中を歩き、途中で合羽も通すような大雨に遭いながら夕暮時にようやく一ノ関に着いたと書いてある。

石巻駅から石巻線で小牛田に向かう。50～60年前この地を旅したことがあったが、小牛田は東北本線の拠点駅だった。東北本線の列車から石巻線・陸羽東線に乗り換える駅で、夜行列車が何本も停まり、眠らない駅だった。新幹線が走り、夜行列車がなくなり、信越線の小諸駅と同様に静かな駅になってしまった。その頃の名残か、駅前旅館が残っているので、利用してみる。<小牛田に一泊>

●平泉・尿前（しとまえ）の関へ向かう

小牛田から出る下り列車は一ノ関までしか行かない。一ノ関での乗換え時間を含めると平泉までの所要時間は、最短で1時間、悪くすると2時間近くかかることもある。

「おくのほそ道」では一ノ関に泊って平泉を往復して、再び一ノ関に泊っている。

平泉で下車して、中尊寺・毛越寺を拝観したいが、少々駅から離れているのでバスに乗らなければならない。

一ノ関を出た芭蕉一行は金成・岩ヶ崎・一迫を抜けて栗駒山の長い裾野を横切って岩出山で一泊。

こちらは中尊寺・毛越寺・藤原秀衡館跡などを見て平泉駅に戻って昼食ということになるかもしれない。

芭蕉が歩いた道は交通機関がないところなので、東北本線で小牛田まで戻って陸羽東線に乗り換える。ここでも一時間に一本程度のダイヤなので注意を要するが、ほとんどの列車は鳴子温泉止まりなのでやや安心。鳴子温泉駅まで約一時間。<鳴子温泉に一泊>

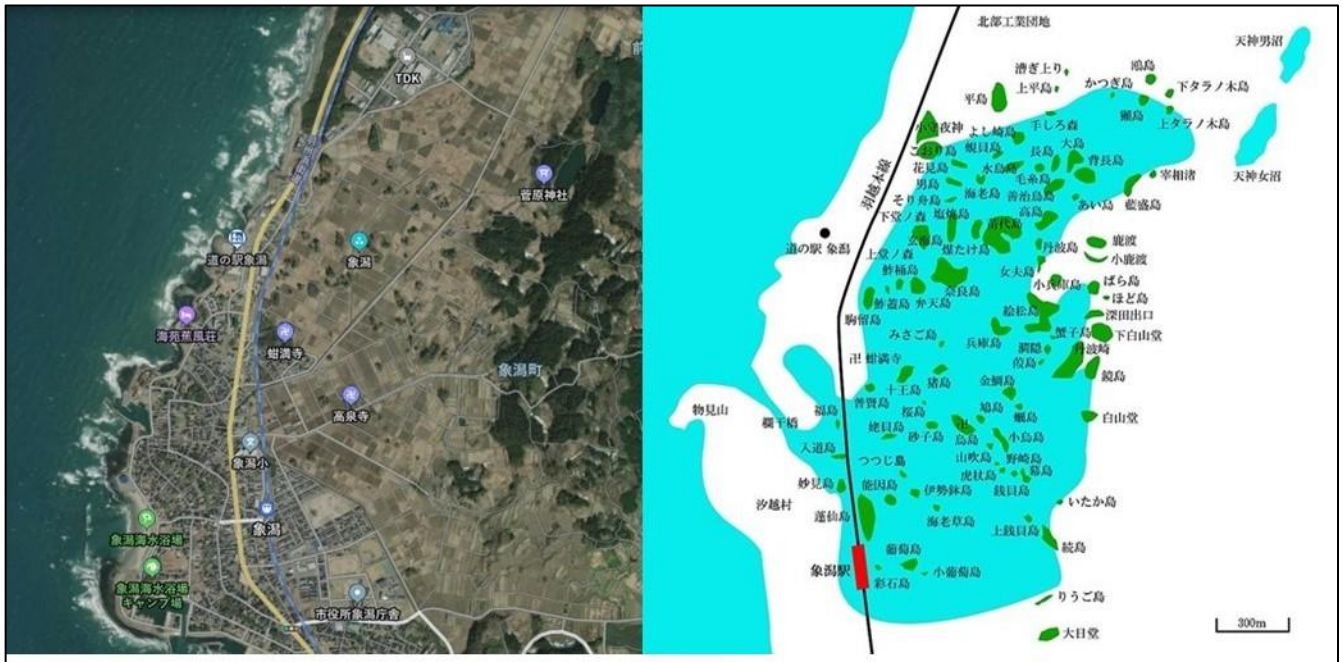
●尿前の関そして出羽国へ

岩出山で一泊した芭蕉一行は、翌日も北羽前街道の悪路を歩いて鳴子温泉の先にある尿前の関に辿り着いた。今は鳴子峡と名が付く峡谷となっているが、昔はこの峡谷を高巻くように道があり、そこに尿前の関があった。

関を越えた後は、海抜320mほどの峠を越えて出羽国（山形県）に入り、堺田で宿泊。悪天候が続きここに滞在することになるのだが、ここでできた句が、かの有名な「蚤虱馬の尿（ばり）するまくらもと」

堺田を出て、明神山の南麓を南の沢に入り、海抜498mの山刀伐（なたぎり）峠を越えて尾花沢に入った。
鳴子温泉駅から陸羽東線に乗って新庄へ、奥羽本線に乗り換えて大石田へ 2 時間弱。
大正15年（1926年）に大石田と尾花沢の間に尾花沢鉄道が開通。のちに山形交通尾花沢線と名が変わり奥羽本線の大石田駅と尾花沢の町を結ぶ 2.6Kmの民間鉄道として愛用されてきたが、昭和44年（1969年）に廃止してバス路線に置き換えられた。奥羽本線の駅がある大石田町は人口58百人だが、鉄道のない尾花沢市は人口13千人。
芭蕉一行は、尾花沢に10日ほど滞在したのち、立石寺を目指して出発、羽州街道を南へ天童まで30Kmの歩き、山寺街道に入り約 8Km東進し山懐に入った。
まずは大石田駅から奥羽本線に乗り山形まで50分ほど。仙山線に乗り換えるが一時間に一本程度のダイヤ。
山寺駅で下車して立石寺を覗いてくる。鳴子温泉を朝出た旅だと、そろそろ夕暮時かもしれない。
仙山線で山形まで戻って、この日の行程は終りか。<山形に一泊>
●山寺から出羽三山廻りへ
山寺を拝観した芭蕉一行は来た道を戻り、六田・楯岡・本飯田と北上して、今度は尾花沢に入らず大石田へ。
大石田から黒滝を経て舟形へ出て新庄に向かった。最上川がいくつもの支流を合わせながら激しく蛇行するところなので、通り過ぎるのには馬や船の世話になる道程だったようだ。
船を乗り継いで最上川を下り、清川・狩川まで進み、狩川から羽黒山への道に入った。
現代の旅は、山形から奥羽本線で新庄へ。新庄で陸羽西線に乗り換えて、車窓から最上川の流れを楽しむ。
芭蕉一行の足取りを辿ると狩川で下車して羽黒山を目指すことになるが、バスの便がない。近頃は鶴岡からバスに乗って行くのが主流のようなので、まずは鶴岡を目指すことにする。
陸羽西線は狩川で下車せずそのまま余目まで行く。旅は遂に日本海に出る。
余目から羽越本線に乗り換えて鶴岡へ。山形でやや早めの8時42分発に乗れば鶴岡に正午過ぎに着くことができるが、その次の列車になると夕方になってしまう。
鶴岡のバスターミナルから羽黒山頂上行のバスに乗って、バス登山とする。<羽黒山付近で一泊>
「おくのほそ道」「曽良随行日記」によれば、最上川の岸辺の狩川から南へ歩き羽黒山神社に詣で、月山に登り湯殿山まで縦走して志津に下山。坊に宿泊して翌日は六十里越（海抜約 920m）を登り返して鶴岡に下りた。
しかも三山を巡る中で、信仰登山であるゆえに何日かの断食もしている。
羽黒山（現世をみつめ）・月山（前世を振り返り）・湯殿山（来世を願う）という霊山廻りを、バスと歩きとで体験するのも旅の土産としては逸品になるかもしれない。三山のどこかでもう一泊するのも面白いかもしれない。
●象潟（きさかた）へ鼠ヶ関（ねずがせき）へ
鶴岡に下りた芭蕉一行は、陸路を五里歩き、最上川を船で七里、酒田まで進む。おそらく、羽黒山入りする前に下船した狩川まで歩いたのだろう。
そして次の行先は象潟。右手前方に鳥海山を望みながら北へ歩き、吹浦まで来ると鳥海山は巨大な山になり、左手には日本海が迫るようになる。象潟は松島に次ぐ景観と言われる大規模な入江（潟湖：せきこ）だった。
景観を詠んだ歌が古今和歌集・新古今和歌集などに数多くあり、西行法師・能因法師なども訪れて

いる。
何百年もの間に地震等による地盤の隆起、潟湖の湿原化、湿原の乾燥・陸地化などが進み、想像することすら困難なほどに変化してしまった。そして陸地化してしまった象潟は開拓されて農地になり人も住むようになった。



2024年の象潟（航空写真）　　昔の象潟（模式図）

鶴岡から羽越本線に乗って象潟まで行ってみる。鶴岡から出た列車は酒田行ばかりなので乗り換えなければならない。象潟までの所要時間は1時間20分ほど、しかし乗る列車によっては 2 時間弱要することもある。
広大な農地が広がる中に点在する小山は往時の島の名残で、それぞれの島の名が地名として残されている。
芭蕉一行が船で渡り、訪れた寺社の中で残っているものもある。
一行は象潟を訪れたあと、羽州浜街道を南下。難所と言われた三崎峠を越えて女鹿（めが）に下り、この日は吹浦に宿をとり、酒田に戻った。そして、さらに南下を続け、羽前大山から山越えして由良に出て、右手に日本海を見ながら温海を経て鼠ヶ関に向かった。
象潟の地形をのぞき見した後、羽越本線に乗り鼠ヶ関を目指すが、酒田で乗り換える関係で乗る列車によって 2 時間半から 4 時間かかる。海辺の宿で日本海を満喫することにする。<鼠ヶ関に一泊>
鼠ヶ関の関所跡を訪ねて付近を散策するのも悪くない。

以上